

松江高専バレーボール部を振り返って

松江工業高等専門学校 男子バレーボール部顧問 村上 享 先生



高専で5年間学び、更にそれぞれがいろいろな環境で日々学習していると思われま。そして、勉強すればするほど、日常の何気ないもの一つ一つが実はものすごく、きちんとした根拠があることに驚かされていると思います。バレーボールも同じで、強いチームは同じような練習をしています。これにもすべて根拠があってやっているわけですが、松江高専のバレー部は少し視点を変えています。高校バレーは正味2年半です。この場合、ポテンシャルが大きくものを言います。つまり、中学校の優れた選手を多く集めれば勝てるということになります。島根県では中学校選抜の先発選手の中でもミドルとリベロ以外、すなわち、サイドをする選手とセッターの4人が多く行った学校が優勝し続けています。もう30年です。しかし、4年、5年間で育てるとなると、いろいろなことができます。初めて全国高専大会を制覇した時のエースは、中学校の時セッターでした。最も充実した時代のセッターは、中学校の時ライトでした。私が松江高専で育てた中で、最も優秀なりベロは陸上部でした。高専では「育てることができる」、これが私の考える少し違う視点で取り組める理由です。バレー部OBは卒業するとわかるとは思いますが、高校のバレーが終わった後、体が大きくなり、一方で動きに無駄がなく、しなやかな動きができるようになったと思います。この体の使い方、組織的に動けると美しいバレーになっていきます。一般の強豪チームと戦っても、まったく負けなかった時期があります。このときの選手は中学校時には、バレー部でなかったものや、まったくの無名選手も入っています。高専でスポーツに真摯に取り組むことは未来と希望がある、と思っています。なので、バレーが一番上手になる4、5年生での取り組みには期待したいものがあります。自分から取り組むバレー、これに腹を据えて臨めば、立派な選手・人間になれることでしょう。これは、バレーボールに限りません。自分のしたいことに腹を据えて臨んでほしいと思います。最後に、私が選手に言っている大切なことは「人間教育」です。バレーを通じて、豊かな人格形成をすることが最も重要です。なので、勉強を一番頑張らないといけないことは自明です。学生です。

高専バレーの秘密を、一つ披露します。ひまわりの花の中央にある種の配列は、螺旋を描いている。特に、右回り螺旋と左回り螺旋の二重構造である。同じことが、松ぼっくりやパイナップルにもいえる。螺旋の数を数えると、多くは、時計回りが8で、反時計回りが13となっている。実は、これらは1,1,2,3,5,8,13,21,34,55・・・と続くフィボナッチ数列の中の数字である。階段を1度に一段か二段上がりのどちらかでするとすると、この時の登り数はフィボナッチ数列となる。フィボナッチ数列の隣同士の数の比は約1.618となり、これは黄金比とも呼ばれる。ギリシャのパルテノン神殿、パリの凱旋門、名刺、図書カードなどの縦横の比の値が黄金比で、最も均齊のとれた美しい長方形の形といわれている。

松江高専の変則パンチリードブロックのホームポジションは、ミドルとオポ、ミドルとサイドの距離が黄金比に近く、少しミドルに負担を多くしています。このほうがすべての攻撃に2枚ブロックで対応しやすく、ラインを下げたうちのレシーブ体系にはまっているからです。また、サーブで崩して、中に打たせるバレーを目指すうちのバレーは、攻撃に対処するレシーブラインは、センターがかなりレフト寄りです。後ろの3人の距離の比も黄金比に近い距離感を保つようにしています。

今度こそ最後に、春高バレー出場にあたり、多大な寄付をしていただきました。ここに感謝の言葉を書かせていただきます。ありがとうございました。



令和2年11月 島根県高等学校バレーボール選手権大会 優勝(春高バレー出場決定)



令和元年2月 中国高等学校新人バレーボール大会 優勝



集合写真



春高バレー出場選手

編集後記

コロナやオリンピックがニュースの見出しになることが多い昨今ですが、松江高専でのビッグニュースといえば、男子バレーボール部の春高バレー出場です。今号では男子バレーボール部の顧問を長く務められている村上先生に寄稿していただきました。また、同窓会室の展示は、ぜひ多くの方にご覧になっていただきたいと思います。積極的に「観に来てください!」とはなかなか言い難い社会状況ではございますが、機会がありましたらぜひご覧ください。

松江工業高等専門学校

同窓会 会報

第11号

2021.8.6発行

同窓会事務局

〒690-8518 島根県松江市西生馬町14-4 松江工業高等専門学校内
TEL: 0852-36-5111 FAX: 0852-36-5119 E-mail: dosokai-jimukyoku@matsue-ct.jp

<http://www2.matsue-ct.ac.jp/dosokai/>

同窓会の組織強化に向けて

松江工業高等専門学校同窓会 会長 陶山 知政 (24期・土木)



新型コロナウイルス感染症の終息が見えず、何時になったら元の暮らしに戻ることができるのかと不平不満ばかりが積もる今日この頃ではありますが、会員の皆様におかれましては益々ご健勝のことと思います。

本年1月には男子バレー部が全日本バレーボール高等学校選手権(通称:春高バレー)に全国高専史上初出場を果たすという明るい話題からスタートし、また今年には松江高専が誕生した1964年(昭和39年)以来、57年ぶりの東京オリンピック2020が開催され、多くの日本選手が活躍することによって、明日への希望を与えてくれていると感じています。

さて先般、今年度の第1回理事会を開催し、今後の同窓会役員の組織強化についての議論をスタートさせました。

本同窓会は任意団体ではありますが、会員数も8,000人を超え、社会的立場も高まっています。

現在、同窓会は設立から50年以上経っていることから幅広い世代で構成されているにも関わらず、理事会等の構成員には卒業期や出身学科の偏りがある、あるいは女性役員が不在であるなど、多く

の課題があります。

今後、同窓会と母校がさらに発展していくためには、同窓会の中軸を担う役員の組織強化を図り、幅広い学科や世代が役員として同窓会活動に主体的に関わり、会員相互の交流が深まる組織にしていく必要があるのではないかと考えていますので、しっかりと議論してまいりたいと思います。

話はかわりますが、昨年開館した学憩館(図書館がある建物)に同窓会室を設置しました。

先日、学校の歴史における同窓会からの支援や増改築の変遷が分かる航空写真、また節目の年々に学校や同窓会で作成した記念グッズなどを同窓会室横の壁面に展示しました。同窓会員の皆様におかれましては、学校にお立ち寄りの際にお時間がありましたらぜひご覧下さい。

結びとなりますが、本同窓会は母校が発展継続することにより新たな会員が生まれ、さらにはその会員相互のつながりがあってこそ成り立つものであると思っています。本同窓会が会員の皆様にとって身近な存在に感じていただけるよう一層努めてまいりたいと考えています。

今後の同窓会活動にご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。ましてご挨拶とさせていただきます。

校長ご挨拶

松江工業高等専門学校 校長 大津 宏康



松江工業高等専門学校同窓会の関係者の皆様には、長年にわたり本校における教育研究および課外活動に対して多大な支援をいただいておりますことに、教職員を代表して厚く御礼申し上げます。昨年度は図書館改修関連事業に対して、多大なご寄付をいただきましたことに感謝申し上げます。図書館改修事業につきましては、昨年8月17日に同窓会会長陶山様を来賓としてお招きし開所式を開催しました。新しい図書館は、従来とは異なりラーニングコモンズを取り入れた明るい学びあいの施設となっておりますので、同窓生の皆様方には是非一度ご覧いただきたいと思っております。

さて、コロナ禍での学校運営ですが、昨年11月から対面講義を実施しております。そして、本年3月に卒業式を、4月に入学式を対面形式で開催しました。しかし、いずれの式も、新型コロナウイルス感染症対策として、同窓会代表をはじめとする来賓はお招きせず、保護者の参加も各学生当り1人限定という形式で開催いたしました。また、例年7月に開催されます中国地区高等専門学校体育大会(夏

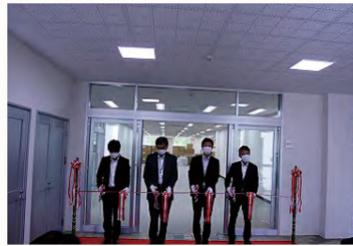
季大会)も、岡山県および広島県に緊急事態宣言が発出されたことを踏まえ中止となり、代替大会を競技ごとに別日程で開催されることになりました。このように、学生諸君は、残念なことに本年度もこれまでに経験をしたことのないような制約を強いられています。

その一方で、コロナ禍においても松江高専生の求人状況は好調を維持しております。例年5年卒業時の進路は、専攻科進学者および大学編入者がそれぞれ20%で、就職者は60%程度(その内、県内就職者30~40%、県外就職者60~70%)ですが、昨年度および今年度とも就職予定者に対する求人倍率は20倍を超えています。これもひとえに、卒業生の皆様が築いて来られた松江高専ブランドのお陰と認識しております。この場を借りまして、あらためて同窓会の皆様のご尽力に御礼を申し上げたいと思っております。

現状のコロナ禍では、ポストコロナの新時代を予測することは難しいでしょう。しかし、教職員は、「本校同窓生による伝統の力」を継続すべく、松江高専ブランドにふさわしい人材の輩出を目指し教育研究に取り組んでいく所存ですので、同窓会の皆様にはこれまでも増して益々のご協力をお願い申し上げます。

同窓会この1年 (2020年8月~2021年7月)

- 令和2年8月1日 同窓会報(第10号)発行
- 令和2年8月17日 「学憩館」竣工記念式典が挙行政、陶山会長が出席
学憩館とは・・・施設の老朽化が顕著となった図書館・情報処理室を改修し、図書館・情報処理室・保健室・相談室が一体となった総合施設
同窓会では、本改修工事に対して寄附を行っており、「同窓会室」が設けられました。



テープカットの様相
(一番左が陶山会長、その隣が大津校長)



同窓会室に掲げられた看板



同窓会室前の壁面展示
(沿革や過去の航空写真が展示されています)

- 令和3年3月13日 令和2年度 第2回理事会@松江高専会議室
- 令和3年3月17日 第53回卒業式および第18回専攻科修了式@島根県民会館
コロナ禍のため来賓はなく、同窓会入会式も簡略化して「入会に関するアナウンス」のみ実施しました。新規の入会者は、185名です。
卒業記念品として、図書カード(500円分)を贈呈いたしました。
- 令和3年6月19日 令和3年度 第1回理事会@松江高専会議室

※理事会資料は年に1回、各クラスの代議員に送付しております。

コロナ禍における関東支部の活動について

松江高専同窓会関東支部(関東直野会) 会長 浅野 智之 (通算38期・情報(情報10期))

関東で活躍している松江高専卒業生同士の親睦を深め、この場から新たな取り組み等が生まれることを期待して、2016年から松江高専同窓会関東支部を「関東直野会」と名付けて設立し、5年が過ぎました。コロナ禍以前は毎年1回秋頃に松江高専の先生もお招きした交流イベントを開催しており、幅広い年代の大勢の方々にご参加いただき、毎回盛況でした。松江高専を卒業されて新たに関東に出てこられた方々を招いた歓迎会を行ったり、趣味の集まりと一緒に参加したり、フリーランスで活躍している方々同士のお仕事につながる話が進んだり、本イベントが卒業生同士の交流のハブ(結節点)として機能しています。

一方でコロナ禍となり、人を集めたイベントを開催することが難しい情勢となりました。その反面で様々な「リモート化」が普及しました。交流イベントのオンライン開催の検討も行いましたが、幅広い年代の方を対象とし、はじめて会う方も多くいらっしゃる場所で交流を促すためには対面による開催がよいと判断し、この状況が収まるまではイベントの開催を控えています。

コロナ禍が収まる頃には今度は対面に加えてリモートの技術もうまく取り入れて複数拠点をつなぐイベントとするなど、これまで以上にパワーアップしたイベントを開催したいと考えています。現在、本会の運営は卒業してから10年以内のメンバーを中心に有志で卒業生のネットワークの強化に取り組んでいますが、ぜひ様々な方にご協力いただき、活動を広げていきたいと考えています。

関東直野会の活動状況はWebページで公開しています。招待制のメーリングリストやFacebookページでは、より詳しい活動報告やイベント案内を掲載していますので、ご覧になりたい方は下記の連絡先にぜひお気軽にご連絡ください。また、本会の運営へのご協力も下記連絡先までお願いします。

Webページ: <https://www.matsue-ct.tokyo/>
メール連絡先: info@matsue-ct.tokyo



過去の開催の様子

会員の声

「呪文」



島根県庁 渡部 文明 (土木・16期)

高専に入学してから42年、卒業して37年あまり、気が付けば膨大な時間が経過してしまいました。時代も随分様変わりをしましたね。すっかり見なくなったもの、「製図板、ケント紙、T型定規、デバイダ、アリダード、スチールテープ・・・」。これらの見かけなくなったモノの使い方を教えてくれた高専。でもそれは私が高専で得た大切なものではありません。

寮生活ができることに魅力を感じて入学したものの、現実にかかる出来事に当時15歳の私は唖然としました。なにせ、そこでの登場人物はオッサンみたいな先輩に加えて、自己主張の強い同級生、独特の雰囲気を持つ教授陣、当然見渡す限りの男、男、男の群。これらの人たちの様々な形でのカラミ(なかには悪の道への誘いもあったなあ)の中で、知らず知らず得たもの、時間の経過とともに陳腐化するモノの使い方みたいに単純なものではなく「この先、生きて行くための塩梅」みたいなもの、それこそが私が高専で得た大切なものだった気がします。

そして就職。公務員となった私は世界を股にかけて大活躍することもなく、ただただ目の前のいろんなコトをクリアするイマの連続で現在に至るわけです。これまで仕事で窮地に陥ることも多々ありましたが、そこをなんとか凌げたのは高専で得たあの大切なものの感覚と、同じ職場で活躍する同窓の先輩方のおかげでした。

そういつまでも続くとともに、同窓の皆様が益々活躍されることを祈っています。

そうそう、もう一つ高専で得た大切なものを紹介するのを忘れていました。それは一つの呪文、「インカワイシマリユーイトーイ・・・ワキヤマダヨネダワタナベ」。不定期に思い出して口にする呪文です。この呪文を唱えたらなんとなくエネルギーが湧いてくるんです。ただ、呪文の途中で心を締め付けられる部分が出てきたのは、やっぱりあれから膨大な時間が経ったせいなのでしょうね。

環境と友人が自分を成長させてくれた



パナソニック株式会社
マニファクチャリング部門本部 石倉 智貴
(49期・電子制御(電子制御26期))

皆さん、こんにちは!平成28年度に電子制御工学科を卒業いたしました石倉智貴と申します。卒業後は、専攻科・大学院と進学し、今年度4月より新社会人となりました。新社会人として一步を踏み出し始めたこのタイミングで高専生活を振り返ってみたいと思います。本題の前に、皆さんは心理学の中で有名なノミの実験をご存知でしょうか?詳細な説明は省きますが、10cmしか飛ばなくなったノミの群れの中に30cm飛ばすノミを放つとノミの群れは次々と30cm飛ばすようになり心理的限界を打ち壊すという実験です。振り返るとこのノミの実験と高専生活がすごく似ていると感じています。

前振りもさておき、松江高専を入学することに決めた理由は、エンジニアになるための最高の学びができる自由な「環境」でした。今思えば、学生生活を共に過ごした「友人」の存在も高専の良さであると確信しています。「夜遅くまでテスト勉強を共にした友人」、「価値観が違う中で話し合いながら一つの目標を設定し、稽古に励んだ部活動の友人」、「全力でイベントや遊びに参加し、興奮を分かち合った友人」など自分には無い才能を持った素敵な友人と巡り会えたと思っています。「環境」と「友人」のおかげで自分の心理的限界を打ち壊し学業面だけでなく、人間性の部分でも大きく成長できたと実感しています。これからも高専で巡り会えた友人と刺激し合いながら、さらに高く飛びたいと思っています。

最後になりましたが、同窓会会報に寄稿する機会を頂けたことに感謝するとともに松江高専のますますのご発展と皆さまのご活躍を祈念しております。

p.s. 新社会人として様々な社会問題を目にする機会が多くあります。例えば、SDGs、カーボンニュートラルなどです。それに伴って、(少々生意気ですが・・・)学んで創れるエンジニアという高専や私自身の価値も時代とともに進化していると思っています。どんな人材や価値が求められているかという問いに対して共創できればと思っています。

令和2年度 定年退職教員 紹介



最高の「ご縁」だった松江高専

環境・建設工学科 荒尾 慎司 先生

私は、28才で民間企業に就職し、その後民間企業から私立大学へ転職、さらに私立大学から民間企業へ転職して、最後の職場「松江高専」にたどり着きました。九州出身の私が全く縁もゆかりもない島根県松江市で最後の職場に出会うとは全く想像できませんでした。しかし、「縁結び」で有名な出雲大社の東部に位置する松江高専に最後の職場を与えてくださったのは、神様からの贈り物「ご縁」だったのでしょ。

平成20年4月1日に松江高専に採用され、定年退職した令和3年3月31日までの13年間、あつという間でしたが、これまでの人生の中でもっとも充実した幸せな日々を送ることができました。私は、中学、高校、大学でソフトテニス部(昔は軟式庭球部と言っていました)に所属していました。松江高専に採用されて2年目に、森山先生(バスケットボール部の主顧問で高専大会では何度も優勝に導かれた先生)からのお願もあり、ソフトテニス部の顧問を務めることになりました。これも何かの「ご縁」なのかもしれませんが、当時、とんでもなく強いペアに巡り合い、島根県の高体連の試合で優勝、中国地区高専体育大会、全国高専体育大会で優勝する等、全国の高専のソフトテニス部員の憧れの存在でした。全国高専体育大会の個人戦ダブルスで優勝したときには、他高専の選手からテニスボールにサイン攻めにあいました。すぐ近くでその様子を見ていましたが、本当にビックリしました。彼らとその当時一緒にプレーをした松江高専の歴史上最強のメンバーとともに全国各地に遠征して試合を楽しむことができました。以上のように定年退職するまで、週末の大会を楽しみながら仕事をさせていただきました。頭の中では常に試合結果(優勝)を想像しながら仕事をしてきたのです。本当に楽しくてしょうがなかったです。「ソフトテニスバカ」とでもいうのでしょうか。松江高専のソフトテニス部に所属した学生全員に大感謝です。

もうひとつ松江高専で「ご縁」ができたのは研究活動でした。私立大学で14年間やってきた研究を松江高専でも12年間継続し、合計で26年間、ひとつの研究テーマを対象に研究できたことは本当に有難いことでした。松江高専には優秀な学生が多く、これまで関わってきた学生の中でも、チョー優秀な学生(専攻科を経て京都大学大学院進学)に出会うことができました。彼がいなかったら、26年間も継続して研究を続けることはできなかったと思います。また、7年間民間企業と、5年間大学との共同研究にも携わることができました。非常に楽しい研究生活を送ることができたのもいろんな人との「ご縁」だったのでしょ。

最後になりましたが、これまでの人生を振り返ると、苦しいときほど気持ちを切り替えて新たな目標を設定して毎日を前向きに少しずつ頑張ったことが、いい「ご縁」に結びついたと思います。

退職に際し同窓会より記念品を頂き誠に有難うございました。皆様のご多幸とご活躍、松江高専の益々のご発展をお祈り申し上げます。